

6 読み聞かせについて考える

1 研究の動機

どんな障害をもった子どもも、優しく素直な心をもっている。その心をより豊かにするために、読み聞かせ ― 絵本による心情の豊かさ ― の大切さを思うのである。

そのため、このグループでは、子どもの発達と障害に応じた絵本の出会わせを考慮し、個々の子どもの心情（かわいい・優しい・美しい・おもしろい・かわいそう等）の豊かさを願い、研究をすすめていきたいと思ったのである。

ところで、この研究にあたり、いろいろの参考文献を手にした。その中に下記のような一節があり、読み合った時に、更に、この研究実践の必要性をもったのである。

『障害児の読書教育』 ― ちえ遅れの子どもたちへの実践 ― （国土社）より
― 普通学校での読書教育は、「読む力」をつけること、「本を選ぶ力」をつけることにあるといわれる。もちろん、ちえ遅れの子どもたちの場合も、それらをめざしていることに変わりはない。しかし、これらの「力」をつけるのは、一生かかっても困難だろうと思われるのが、ちえ遅れの子どもたちの実態である。

だが、「読む力」「本を選ぶ力」がなければ、「本の楽しさ」にふれることができないというものでもない。ちえ遅れの子どもたちのなかには、ことばのない、文字も読めない子どもたちが大勢いる。こんな重度障害をもつ子どもでも、読み聞かせ（本は人間の心を文章化しているのであり、その心を音声に出すことは、子どもたちにとって心地よい音楽を聴くように促えられているのかもしれないが）を楽しんでいる事例がよくある。

さまざまに障害の程度のちがう、ちえ遅れの子どもたちの実態から、ねらいを一般化して云々することはできないが、「本は楽しいものなんだ」ということをわかってもらえれば、それでいいと思っている。そのかわり、本を媒介にして周囲の者と、ことばによる人間関係を深めてほしいものである。

次の世代を生きる子どもたちの中から、ちえ遅れの子どもたちだけ、文字が読めないから、ことばが出ないからといって、除外していいはずはない。だが、ちえ遅れや重複障害児たちの読書教育は、障害をもたない子や視覚障害や聴覚障害の子どもたちに比べて、非常に貧しいのが現状である。

その貧しさの原因の1つが、「ちえ遅れの子どもたちに、本を出会わせる人が少ない」ということであろう。―

2 研究にあたって

(1) 読み聞かせグループでの共通理解

① 参考文献で学習し共に学び合う

障害をもつ子どもたちの、絵本の読み聞かせの大切さを理解するために、参考文献（図書など）を通して学習した。そして、週1～2回の読み聞かせグループの会の中で、話題を提供して話し合いをするなど、共に学習してきた。

② 読み聞かせグループで共通理解したこと

- ・ ちえ遅れの子どもたちは、健常児と同じように、優しく素直な心をもっている。絵本を読み聞かせることにより、その心に働きかけて、ちえやことばを育てると共に、より豊かな心を育て、人間として生きていくための人格の基礎を育てることができる。
- ・ ちえ遅れの子どもたちは、生活経験が乏しいため、絵本を読み聞かせることにより、絵本で間接的に生活経験や人間関係を豊かにすることができる。

(2) 読み聞かせの実践

① 各担当クラスでの読み聞かせの実践

・ A教諭

小学部1組	木曜日の1時45分～2時	下校前の時間に読み聞かせ
小学部3組	月曜日の3限～4限	生活の時間に読み聞かせ

・ B教諭

小学部3組	月曜日の3限～4限	生活の時間に読み聞かせ
-------	-----------	-------------

・ C教諭

高等部Bホーム 随時

・ D教諭

高等部 月・火・水曜日の3限～4限 グループ学習の時間に読み聞かせ

② 校内「絵本の日」での読み聞かせの実践

読み聞かせグループが、全校の子どもたちに呼びかけて、本校の和室で、毎週水曜日の昼食後12時50分～13時05分の15分間 「絵本の日」として読み聞かせを実施している。

(3) 公共図書館の利用

高等部女子が石川県立図書館児童室で自由読書を実施した。

(4) 絵本のリスト

読み聞かせグループで、今年度読み聞かせた絵本のリストを作る。なお、アンケート調査により、各学部の学級担任が子どもたちに読み聞かせた絵本の中で、よいと思った本を紹介してもらう。

3 実践

(1) 各担当クラスでの読み聞かせの実践

① 小学部1組について

4月の初めに、小学部1組の担任より「小学部1組で、子供が下校の仕度を終えてから下校の挨拶をするまでの間、週に1回昨年に続いて何かをやっていただけませんか。」という話しがあった。それで、いろいろ考えた末、絵本の読み聞かせをすることにした。

1組のクラスは、1年生と2年生で編成されており、自閉的傾向・ダウン症・その他の障害を持った児童が8名在籍している。この子たちの中には絵本の話聞いて、部分的に「おもしろい」等の感想がいえる子が1名と、印象に残ったところで声をあげたり手をたたいたりする子が3名いる。また、絵本の中でくり返しのあることばや生活体験のある絵に反応を示す子が2名と、乗用車と食べ物の絵や食べるまねに反応を示す子が2名いる。

このクラスでは、下校時刻の15分前に、学級担任が毎日交代で手あそびやパネルシアター・リズム・紙芝居を行っている。しかし、下校時は学級担任だけでは何かと忙しいので、教師自身も毎週木曜日に、絵本の読み聞かせでお手伝いすることになった。

1学期の初めは、子どもたちが時々眺めていた『ベビーブック』を読み聞かせることにした。この本は絵が鮮明で、子どもの生活体験（乗り物・生き物・食べ物）があるものが掲載されているのでそれらの絵に反応を示していた。しかし、内容があまりにも短編的であるので、『こぐまちゃん』シリーズの絵本を読み聞かせることにした。この本の内容はおもしろくてわかりやすかったからか、指で絵をおさえたり手をたたいて喜んでた。

2学期になり、子どもたちの生活ペースがもとにもどりきらないので、食べ物や生活関係の本『ふしぎなたまご』『たべたのだあれ』や、『じゅんちゃん』シリーズ本を読むことにした。この本は軽やかなことばで書いてある。特にくり返しや擬音のことばに喜び、口まねをしていた。学校生活に慣れてきてからは、今後の学校生活を理解させ充実させるために、学校行事にちなんだ『こぎつねキッコえんそくのまき』や、『とんぼのうんどうかい』の本を読んで聞かせた。また、行事の絵本のあい間に『おでかけのまねに』『どうすればいいのかな』といった本を読み聞かせたが、内容がやや難しかったのか反応がにぶかった。そこで生活体験のある『ひとりぼっちのねこ』『三びきのねこ』等のねこシリーズの絵本を読んで聞かせた。その時、本に対して一層の興味を持たせるために、絵本の主人公のペープサートを作り読み聞かせた。特にねこのペープサートのひげに驚きを示したり、かわいいねこのペープサートには、いたわりを示すなど、部分的であるが絵本のおもしろさを感じたようである。さらに、絵本の楽しさを理解させるために、しかけ絵本の『ころちゃん』シリーズ本や、『スーパーマンサンタ』を読んで聞かせた。すると、絵本に食い入るように眺め喜んでた。また、読み終わった後「おもしろかった」と言ったり、印象に残ったページを開いたりして、その子その子なりに絵本を楽しんでいたようである。

② 小学部3組について

この小学部の高学年になぜ絵本の読み聞かせを取り上げたか、その理由を述べる。まず子どもたちには、できるだけ多くの本に接し、その中から、好きな本を見つけていく事。小さい頃から本に接していると、本に対する喜びを感じる人が多くなる事、そして、私自身小学校時代に読んでもらった本がとても印象的だった事などが、その理由として挙げられる。

次に、クラスの子どもの実態であるが、5年生4名、6年生3名の計7名で構成され、障害は、ダウン症・心臓疾患・運動協調障害・自閉的傾向と様々であるが、クラスの傾向としては、比較的本に対する興味は持っていると思われる。

実践の方法であるが、1つは朝の会、終りの会の短い時間（5～10分）で読むものと、もう1つは、生活の授業として行うものとに分けられる。朝の会などで読まれるものは、子どもたちが、見たい絵本を選んでくる形になっており、中でも『とんとんとん、いれてくださいな』は、何度も読んでもらっているうちに、ストーリーを理解し、次にどの様な動物が登場してくるか期待をいただくのだと思う。他に、『アンパンマン』や『とんぼのうんどうかい』などは、悪者が登場し、最後にやっつけられるので、非常に興味を持って見ている。また、生活の授業として月曜の11時～12時に行うものは、教師があらかじめ読む本を決めておき、はじめに導入をし、読み終わってから本の感想を作文にしたり、絵を描かせてまとめる事がある。例えば、『食べたのだあれ』『こぎつねキッコのえんそくのまき』『11ぴきのねこ』シリーズ・『しろいうさぎとくろいうさぎ』などである。中でも『11ぴきのねこ』は子どもたちが興味を持ち、表現会の劇にまで発展していったのである。この本の選択に当っては、仲間意識がもてるクラスの特徴が生かされた。初めは、何度も読み聞かせをし、そして、その中に登場してくるねこ、大きな魚、いかだを実際に作ったのである。ねこは穴通しの学習から、魚はちぎったり、貼ったりする学習から、いかだは、金づち、のこぎりを使い本当に乗る事のできるバランスボードを作ったのである。こうして、『11ぴきのねこ』のイメージをふくらませていき、11月19日に本番を迎えたのである。

1学期・2学期と絵本の読み聞かせをしてきて、子どもたちの反応で変ってきた事がある。それは、1学期間、ほとんど本に注目できなかった自閉的傾向のK君である。足をバタつかせたり、他の友だちにちょっかいを出して、周りに影響を及ぼしていたのであるが2学期も後半に入ると、少しずつ静かになり、周りへの迷惑も減り、それに、時々ではあるが絵本を見ることがある。K君自身にどの様な変化が起きたか分からないが、読み聞かせを、朝の会・終りの会、そして生活の時間と、繰り返すことによって、K君の中に少しずつ定着してきたのではないかと思われる。

③ 高等部Bホームについて

Bホームは男子8名女子3名の計11名で構成されている。能力別グループでみるとHグループ3名、Mグループ2名、L₁グループ3名、L₂グループ3名で、読書好きでいつも歴史物の本を読んでいるHグループのF男から、自閉的傾向でことばが少ないL₂グループのK男まで能力差はあるものの特にリーダーシップをとれる生徒もおらず、のんびりとした明るい雰囲気クラスである。

生徒の下校後の生活を調べてみると、ファミコン、テレビの視聴（歌謡、クイズ番組）に時間を費している生徒が多く、学校の図書棚を利用して本を借りている生徒はほとんどいない状態であった。また、高等部は生活の時間が少なく、朝礼と終礼しか顔を合わせない日もある。そこで、生活の時間の一部をもらい、クラス全員に読みきかせをすることにより、本に親しませ、生徒同士、また生徒と教師である私が同じ感動をわかちあえたらと思い、読みきかせをクラスでも始めることにした。

読む本は生徒の実態や能力差を考えながらその都度選ぶことにしたが、最初の日には以前にも他の子どもたちに読んだことのある『れんらくせんちびっこマリンくん』を選んだ。擬人化されたマリン君と船長さんとの心の交流を描いたこのアニメ絵本は、単純な絵ながら、ストーリーに社会的要素を含み、何より私自身読みやすい本であった。その日は生活の時間にトランプをする予定だったが、時間を少しもらえることになった。そこで、教室にじゅうたんをしき、みんなを集めた。まず、地図を見せて島と島を結ぶ連絡船について説明した後、読み始めた。よそ見をしながらもみんなが笑うと一緒に笑うS子。K男も前列にすわってチラッと見ている。F男のように、最後まで集中して見ている生徒もいる。読み終わると読み手と聞き手との間で張りつめていたものがフッと緩んだ。生徒たちが、どの程度、内容を理解したかは把握できなかったが、みんなそれなりに楽しめたと思う。

第2回目は『三びきのやぎのがらがらどん』を選んだ。この日は椅子を前にもってこさせ、本がよく見えるよう配置した。トロルが登場する場面はうんといわそうに読むと、M男が顔を覆って「わぁー。」と隣のA男にしがみつく。「だいじょうぶ。トロルなんておらんから。」とF男。「トロルはロシアのおばけやし、いるかもよ。」と言うと、「本当かな？」とF男。盛り上がったまま、最後まで一気に読み進んだ。

その後読んだ『だいくとおにろく』でも、鬼が登場するとひょうきん者のM男がこわがって、場を盛り上げてくれた。また、『かえるのつなひき』では、くり返しのことばや、かえる、つなひきという耳慣れたことばに、K男もじっと本を見つめ、耳を澄ませているようだった。『サーカスのライオン』など、少し長めの本になると、最後まで集中できる生徒は限られてしまい、本の選び方の難しさを感じた。

読んだ本は教室に小さな文庫を作り、おもしろそうな10数冊の本とともにいつでも手にとれるようにした。すると、「これおもしろかった。」と借りる生徒や手にとって見る生

徒が一人、二人と増えてきて、読み聞かせるとともに環境を整える必要もあると感じた。

④ 高等部 グループ学習について

高等部で“読み聞かせの授業”をするにあたって

今から8年前に、本校の副校長から次のような依頼があった。

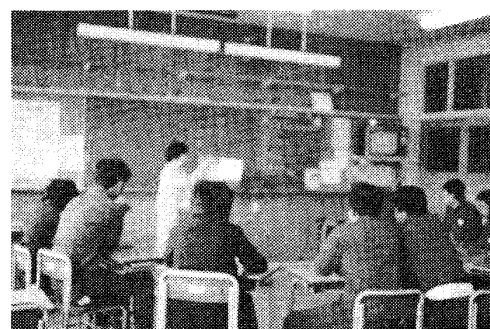
「養護学校（本校）の高等部では、実社会に出る前の教育ということで、各教科を通して生活に実用化されるような面の指導に重点をおいてきた。しかし、それだけではいけないのだと思う。子ども達は、どの子も、優しい心、美しい心、まじめな心、素直な心をもっている。その心をもっと育ててやることや、その子なりに考えていることを素直に育ててやる必要があるのではないだろうかと思う。

そこで、これらの面を育てる方法として、絵本や物語を授業で読んで聞かせてやりたいと思っている。学校としては、国語（言語）の分野として位置づけられるが、文字の読み書きは教えてもらわなくてよいから、とにかく“読み聞かせの授業”をしてほしい」と。

このようなことから、非常勤講師として、生徒たちの反応をみつめ、研究実践を重ねてきた。しかし、なんといっても、生徒たちと共に楽しみながら“読み聞かせの授業”をし生徒たちの反応やつぶやき、感想に励まされている今である。

・ グループ学習（教科別）の時間割

曜日 クラス	月（2・3限）	火（3・4限）	水（3・4限）
H	国（読み聞かせ）	理	数
M	社・理	国（読み聞かせ）	数
L ₁	数	社・理	国（読み聞かせ）
L ₂	国	数	L ₂ は3限のみ
40分 — 40分 （休み 15分）			
40分 — 40分 （5分）			
40分 — 40分 （5分）			



（高等部 グループ学習）

・ 生徒の実態と本（絵本）を選ぶ目あて

Hクラス — このクラスの生徒たちは、絵本を見入ることも出来、内容も大体理解できる。登場人物（動物なども含めて）の行動や、ことばを通して物語の意図がくみとれる。

そのため、少し長い物語を取り上げている。民話絵本（むかし話・伝説・語り伝えられているもの）を主とし、創作絵本（主人公が高等部生徒の年令に近いもの……知能的にやや障害はあっても、思春期としての精神面や情緒面は成長しているからである）も取り入れている。自閉的傾向で、やや理解の浅い生徒には、ことばかけ等配慮している。

Mクラス — このクラスの生徒たちは、自閉的傾向のK君以外は絵本に見入り、話を聞こうとする姿勢である。しかし、物語や話の内容がやや理解しにくいいため、主人公（動物なども含めて）の行動のわかりやすいものやストーリーのわかりやすいものを取り上げる

ことにした。やはり民話絵本が多くなり、Hクラスと同じ本もあるが、このクラスでは、読み聞かせでの手だて（読み方、板書等）やことばかけを考慮している。なお、リズムカルなことばや面白さをもったことばを楽しむ生徒たちである。

L₁L₂クラス — このクラスは、知恵おくれ、自閉的傾向、ことばが無い等という、やや重い障害をもった生徒が多い。授業では、絵本を見る力も話を聞く力もあまりないという生徒たちである。そのため、絵が鮮明で、話の内容も簡単で、ことばのリズムカルなものを取り上げることにした。ことばがリズムカルでくり返しのある部分では、生徒にも言わせ、その絵本の中に同化させるような手だてをとることがある。ことばの無い生徒でも介助の先生の指導で、みんなといっしょに口を開け、その子なりの力で音声を出している。取り上げる本は、幼児向けの絵本が多くなるが、その絵本の意図する心情を生徒たちに少しでもわからせるように配慮している。

- ・ 読み聞かせの授業の1例 高3は現場実習のため欠席（指導者 勝尾外美子）

1989年6月13日(火)	題材 鼻かけじぞうさん	Mクラス 5名	2 時間
〔設定の理由〕この作品は民謡ふうな作品であり、主人公の心情（優しさ）が受けとめやすい。また、畑作物が育つためには水（雨水、湧き水）が大切であることと、お地蔵さまへの温かい目をもたせたい。			
〔目 標〕1.物語の内容を読みとり（聞きとり）豊かな感情を育てる。2.おまあの優しさとお地蔵さんの見守りで、清水が出たことをわからせる。3.感動のつぶやきや感想が言えるようにする。 （生徒の個人の实態は省略する）			
学 習 内 容 と 活 動		指導の留意点（重点と着眼）	
第1時（3 限目 40分） （導入）・地蔵さまはなぜあるのだろうか。 ・鼻かけ地蔵さんの鼻かけの意味を知る （展開）・絵本の表紙で話し合い、登場人物、場面、情景を知る ・『鼻かけじぞうさん』を読んでもらう		・この作品の主題を意識させるために、地蔵さまについて話し合う。生活経験を通して。	
第2時（4 限目 40分） （展開）・この物語の内容を思い出す ・感想を話し合う 教師の発問によって深めていく。板書された感想を読む （まとめ）・板書を記録する。最後に一斉音読を。		<div><div>板書</div><div>「鼻かけじぞうさん」 へおまあはどんな人ですか ◎優しい人 地蔵さんを助けた 男の人を助けた へお地蔵さんはどんな ことをしてくれましたか 。おまあと男の人を まもった。 。わき水を出して、村の 人たちをまもった。</div></div> ・全員が感想を話すような配慮を。 ・物語の良さを感じとらせる。	
（指導の反省）本時は5名だったため、絵をゆっくりと見せることができ、一人ひとりへの言葉かけもよくできた。生徒たちに理解しやすく感動したため、感想も書いた。			

(2) 校内「絵本の日」での読み聞かせの実践

本校では小中高と各学部ごとに図書棚があり、本に興味がある子どもたちは借りてはいるものの、その人数は極めて少ない。内容を見ても同じ本を2～3冊繰り返し借りている程度である。そこで、子ども達に本の楽しさを知らせ、より多くの本と出合わせるためにも、今まで以上に読みきかせの輪を広げる必要があると考えた。また、昼休みなどの長い休み時間に何をするでもなくボーッと過ごす子どもたちが大勢いる現状と考え合わせ、授業という学習の場ではなく昼休みに本の読みきかせの会をもつことになった。

この会は、学年や障害を問わず、子ども自身が楽しみを決めて自由に参加できる会とした。本を読みさかせる中でみんなで楽しいひと時を共有し、子どもたちにとって本がより身近なものになるよう願って6月から「絵本の日」としてスタートした。この会の運営にあたって以下の点について考慮した。

- ・ 週1回水曜日の昼休み 12時50分～1時05分までの間 和室で行う。
- ・ 当日の朝、「絵本の日」のお知らせの看板を玄関と小学部ホールにかける。
- ・ 12時40分に案内の放送を入れる。
- ・ 和室の前と中に本の題名を書いた紙を貼る。
- ・ 司会者はみんなが集まるまでの間、手遊びをする。読み終わった後、簡単なまとめをする。
- ・ 終了後、題名と日付が入った読書カードに名前のスタンプを押して配る。このカードの裏面には感想欄があるが、これは教室や家庭に帰ってから記入してもらうことにして、特に回収したりはしないものとした。
- ・ 読み手は各教官がジャンルを決めて順次分担する。
(民話・昔話、季節・行事、生活・科学、ファンタジー)
- ・ 読み終わったら、その都度反省会をもち、次回にその反省をいかせるようにする。

(中一女子の日記より)

			あ	り	は	り	は	の	い
			も	な	あ	を	た	ほ	ま
			れ	こ	こ	な	づ	し	い
			る	お	っ	い	う	ま	せ
			か	い	て	ま	す	ぶ	ん
			っ	は	す	し	す	し	せ
			た	さ	ず	た	の	び	い
			で	ん	め	か	う	く	か
			す	か	の	た	あ	た	し
				か	し	か	ば	ま	た
				さ	た	ら	あ	ま	ぎ
				ま	を	お	さん	た	り
				れ	き	い	さん	の	す
				た	り	さん	の		ず
				ま	ま	の			め



(絵本の日)

— 「絵本の日」の実践の1例 —

	日付	書名	参加人数	配慮事項	子どもの反応	反省
1 回目	6/13	三びきのやぎの がらがら どん	小 5 中 6 高 10	<ul style="list-style-type: none"> 初めての絵本の日なので、途中から参加する子どもにもわかりやすい絵本を考えた。 最初と最後に全員で題名を読んだり、「がらがらどん」と名前を言わせたりして子どもを集中させた。 	<ul style="list-style-type: none"> 前の方にすわって熱心に見ている子どももいる反面、うるさくさわぐ子や、途中で子どもが入室するのが気になってキョロキョロしている子もいた。 「カタコト、カタコト」と口真似する子がいた。 	<ul style="list-style-type: none"> 集まる人数によっては読み手の姿勢を（立つ すわる）変える必要がある。 遅れて参加する子どもが、場の雰囲気をおこさないよう、後ろの出入口から静かに入室するよう、指導する必要がある。
8 回目	9/27	こぎつねキッ コ うんどう かいのまき	小 5 中 5 高 6	<ul style="list-style-type: none"> 運動会（10/8）が近づいてきたので、行事にちなんだ本を選んだ。 こぎつねキッコとお母さんのペーサートを最初に見せて導入とし、子どもたちの注意を引きつけた。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵が小さかったのか、みんなだんだん前の方に出てきた。 絵をみて何の競技か上手に答える子どもが数名いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもにとって、身近な行事の本を選んだため、集中して見れた。 最後に大きいプログラムを用意して復唱したために印象づけられて良かった。
9 回目	10/4	たべられるし よくぶつ	小 4 中 6 高 6	<ul style="list-style-type: none"> 「今日は研究をしたいです。根っこも研究したいと思います。」と研究ということばで子どもの興味を呼びおこさせた。 実物をもってきて順を追って1つずつ見せていった。 	<ul style="list-style-type: none"> T, 植物って何かな？ S, おはな？ T, キャベツの大きさは？ S, これくらい（両手でかかえる） T, なす食べたことある？ S, ホットプレートでやいた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちにとって身近に見たり食べたりしている物の科学絵本であったため、どの子も興味があった。 地面の上と下という意味から葉と根のことはあえて説明しなかった。 落花生のつき方は理解しにくかったが、実際に食べさせたことで楽しいひと時になった。
14 回目	11/8	三まいのおふ だ	小 3 中 10 高 11	<ul style="list-style-type: none"> 内容のわかりやすい民話であり鬼ばばを通して子どもたちを楽しませるようにした。 三枚のカードに各々、願い事を書いておき、「おふだ」のよさをわからせるように考慮した。 	<ul style="list-style-type: none"> こぞうさんが困った様子には（どうしよう）という思いをもった子どもの反応がみられた。 「『おふだ』でおねがいすればいいよ」という高等部生徒の声もあった。 いつもきている高等部のK男が進んで前にでて、ゲーチャキパーの手あそびをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 三まいのおふだを用意して話をすすめていったことは読みきかせをする上でしやすかった。 おもしろく聞いていたという雰囲気だった。 終わった時、中学部のK君が「その本見せて」といつてきた。ページをめくって楽しんでいるようだった。
15 回目	11/22	しろいうさぎ とくろいうさ ぎ	小 4 中 6 高 8	<ul style="list-style-type: none"> 素直に異性を思いやる気持ち子どもたちにも是非伝えたいと思った。 1つ1つのことばを大切に味わいながら、ゆっくり読むよう心がけた。 	<ul style="list-style-type: none"> 小学部の女子が「こっち男の子、こっち女の子」と前にでてきて指さす。 T, 結婚ってどんなこと？ S, かっていい（中・女） S, けんかしない（高・男） S, なかよし（高・男） 	<ul style="list-style-type: none"> うさぎのアップの表情がとてかわいく子どもたちは引きつけられていたようだ。 裏表紙の絵見せて余韻を残せばよかった。 「おわり」と読み手が言うことによりせつかくの雰囲気がだいなしになることがある。
16 回目	12/6	りんごがたべ たいねずみく ん	小 1 中 5 高 10	<ul style="list-style-type: none"> 本物のりんご1コと背景として大きなりんごの木とりんごの模型を使って雰囲気をもりあげた。 次にでてくる動物の模倣をして何がでてくるか期待させた。 最後にあらすじをふり返りながら模型のりんごを1コずつ取っていった。 	<ul style="list-style-type: none"> T, みんなだったらどうやってりんごをとる？ S, はしこで。 S, ぼうでつつく。 S, 木をゆらす。 高等部のK男が、「ほくもしたい」と前にでてきて、りんごの木にぶつかる真似をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵が小さかったが動物の模倣することにより子どもの注意を本に引きつけることができた。 高等部のK男、K子がこの後この本を借りる。クラスでもう1度読みきかせるとK男もK子も大喜びで、ねずみ君の気持ちになって本を読むことができた。
18 回目	1/10	スイミー	小 3 中 3 高 7	<ul style="list-style-type: none"> スイミーのイメージをもとに作られた音楽をバックに流した。 	<ul style="list-style-type: none"> 最初音楽が流れたので、静かに見入っていた。まぐろの歯のぎざぎざやざりがにのひげ、いそぎんちゃんなどに興味をひかれ身をのりだして見ている子どもがいた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもへの問いかけが多過ぎた。ことばの少ない本の場合の読み方として注意しなければいけない。 音楽の大小、強弱など場面に応じての配慮が必要だった。

1・2学期の間に17冊の絵本を読んだのであるが、水曜日の昼休みは「絵本の日」として定着してきており、お昼の放送が入るやいなや和室に集まってくる子どもたちもいる。その時々行事等の影響はあるものの、平均して20名程の児童・生徒が毎週集まってきて、楽しいながらも静かに絵本を聞こうという雰囲気ができつつある。集まってくる子どもたちは絵本を読んでもらうのがうれしくてたまらない子、カードがほしくてくる子、あまりよくわからないけど担任の先生や友達の声かけでやってくる子など様々である。みんながそろそろまでの間「ゲーチャキパー」の手あそびをするのも定着してきて、今では常連の高等部の自閉的傾向のK男が先生の役をしている。読み終わった後、「その本みせて」とやってきてもう1度本を見たり、「おもしろかったね。」と話す子どもたちが何名かおり、そんな本は「絵本の日」やクラスで何回も読みきかせてやれたらと思う。

読書カード

(3) 公共図書館の利用（高等部女子）

高等部は主として学部図書棚にある本を利用しているが、冊数には限りがある。そこで、もっと多くの本の中からいろいろな分野の本を自分で選んで読書する楽しさを味わってほしいということ、公共の施設を利用するマナーを身につけさせたいということと、また卒業後社会へ出てからの余暇の活用の一手段として、図書館の存在を理解させたいという観点から、県立図書館の児童室へ出掛けた。県立図書館は生徒の足で徒歩15分の、距離としても手頃な範囲にある。

1 回目は5月半ば、男子は田植えの実習のため、女子11名を教師2名で引率して行った。生徒とは①大きな声を出したり、動きまわったりなど他の人の迷惑にならないようにする。②出した本は必ず自分で元へ戻す、という2点を約束した。

あまり人もいなくて静かな雰囲気だったが、生徒たちは少し緊張している様子だった。それでもそれぞれが棚から本を出してきて読んでいた。読む本については、教師は何の指示も与えず生徒の自主性にまかせた。普段から絵本に親しんでいる子は、やはり絵本を手にとって幾冊も読んでいた。図鑑ばかりを手にとる子、字がいっぱい書きこまれた厚い本を最初から最後まで丹念にみる子。表紙のみをよろこんでみている子などさまざまな読書態度をみることができた。

2 回目は12月半ば、男子は実習だったが、時間割の都合で女子のあき時間があったため女子10名、教師2名で出掛けた。前回より半年の期間があったが、前回よりも雰囲気になれたようで、それぞれが自分の思い思いの本を棚から取り出していた。読書態度は前回と同じであった。前回に比べての進歩は、図書貸し出しカードを作ろうかという呼びかけに応じてカードを作った生徒が5名いたことである。

図書館の利用は、学校で本に親しんでいない子も、どのような態度で本に接するかということを見る良い機会であったと思う。生徒からの反応も、また行きたいという子や、本を借りたいという意欲を積極的に示す子もでてきた。そのような気持ちを大切にして今後はカードを利用したり、引率の機会をふやしたり、また読書分野を広げるための教師の働きかけについても配慮しながら、少しでも本を読む楽しさを味わわせたいということと男子にも機会を設けたいと思っている。



(小1 おかえり列車)



(小3 劇「11ぴきのねこ」)



(高B 終礼)

4 まとめと今後の課題

障害をもった子どもたちに、「絵本は楽しいものなんだ」ということをわかってもらい、本好きであるようにするためには、次のようなことが考えられる。

一つには、子どもたちの興味や関心に合った本を選び、読み聞かせを継続して行うことである。本を選ぶ時は、ただ漠然と選ぶのではなく、子供達の実態や能力差を考え、何度読んでもあきず、いつまでも心に残り、読むたびに新しい発見がある絵本を選ぶことが大切である。また、絵本の読み聞かせを行う時も、指導者自身が絵本の楽しさを知ることが大切であり、読み聞かせの時の雰囲気（歌や手遊び・ペープサート等の具体物・自由な発言・劇遊び）作りも大切である。さらに、読み聞かせをする時の技術（声の大きさや強弱・間の取り方・本のめくり方・動作化）等も大切な要素である。このように、よりよい状態の下で絵本に出合わせるということは、本好きになる要因だと思う。

二つには、環境を整えることが大切である。まず、子どもたちが、絵本を読みたい時に、いつでも自由に取り出せる場所に、図書棚を設けてやることが大切である。本校では、各学級や各学部のホールの図書棚・学校の図書館等に一応図書を取りそろえて、自由に取り出せるようにしているが、充実しているとは言えない。特に図書館にいたっては、図鑑等が主であり学習補充の感が強く、図書の種類や本を置く高さに問題がある。従って、今後本校では、各学級や各学部の図書棚に、子どもたちの興味や関心のある本（読んで楽しい本）を充実させることが大切である。また、図書棚に本を置く時に、本を読みたくなるように置くことが大切である。それには、子供の目の高さを考えたり、表紙が子どもに見えるようにしたり、読ませたい本を推薦したりする工夫が必要である。さらに、子どもたちが本を読むように、指導者がしむけることも大切である。学校において、朝の会や終りの会のひととき・授業や自由時間等に、指導者が読み聞かせを繰り返しくりかえし行なって習慣化することが必要である。その時は、ことばや知識を覚えさせようとするのではなく、家庭生活の中でテレビを見たり、音楽を聴く感覚で行うことが大切である。また、家庭でも、父母に本の読み聞かせの大切さを呼びかけて、実施してもらうことが大切である。就寝前のひととき布団の中で、子どもが学校や遊びから帰ってきて一息ついた時、雨や雪等で家の中に閉じこめられている日などに、読み聞かせを実施するよう啓蒙することが大切である。これらのことは、本校である程度は実施しているが、まだまだ不十分なので、今後の課題となるのではないかと思う。

本校の子どもたちは、ちえやことばが遅れているのであって、何もかも全てが遅れているというわけではない。優しい素直な心をもっているのだから、絵本を読み聞かせることにより、その心を豊かにし想像力を育ててやりたい。また、読み聞かせは、ちえやことば知識を育て、人間関係を円滑にして生活経験を豊かにすることにもなるし、思考力が育つことにより創造力を豊かにすることにつながるから、読み聞かせを継続して実施したい。

本校で読み聞かせた絵本のリスト

『絵本の日』で読み聞かせた絵本

書 名	作	絵	出 版 社
三びきのやぎの がらがらどん	せ た ていじ	マーシャ・ブラウン	福 音 館 書 店
さるかに	木 暮 正 夫	赤 星 亮 衛	第 一 法 規
れんらくせん チビッコマリンくん	藤 本 四 郎	鍋 島 よしつぐ	ポ プ ラ 社
まねっこ にゃんこ	末 吉 暁 子	伊 勢 英 子	ブ ッ ク ・ ロ ー ン 出 版 社
おむすびころりん	よだじゅんいち	渡 辺 三 郎	偕 成 社
ぐりとぐらの かいすいよく	中 川 りえこ	大 村 ゆりこ	福 音 館 書 店
へえ六 がんばる	北 彰 介	箕 田 源三郎	岩 崎 書 店
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
こぎつねキッコ『うんどうかいのまき』	松 野 正 子	梶 山 俊 夫	童 心 社
たべられる しょくぶつ	森 谷 憲	寺 島 龍 一	福 音 館 書 店
したきりすずめ	松 谷 みよ子	村 上 こう一	ポ プ ラ 社
しろくまちゃん ばんかいに	若 山 憲	若 山 け ん	こ ぐ ま 社
えんそくの おみやげは	宮 川 ひ ろ	たなか まきこ	新 日 本 出 版 社
サルにいる森	菊 間 かおる	木 村 しゅうじ	新 日 本 出 版 社
さんまいの おふだ(秋田県のむかしばなし)		福 田 庄 助	チャイルド本社
りんごがたべたい ねずみくん	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
サンタクロースってほんとにいるの?	てるおか いつこ	杉 浦 はんも	福 音 館 書 店
スイミー	レオ・レオニ 谷川俊太郎・訳	レオ・レオニ	好 学 社

小学部1組で読み聞かせた絵本

こぐまちゃん おはよう	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんと ぼーる	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんと どうぶつえん	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんの うんてんし	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんの みずあそび	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんの いたいいたい	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんと ふうせん	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃん ありがとう	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃん おやすみ	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
こぐまちゃんの どろあそび	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
しろくまちゃんの ほっとけーき	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社

しろくまちゃん ぱんかいに ふしぎな たまご たべたの だあれ じゅんちゃん いれて じゅんちゃん もういいよ こぎつねキッコの『えんそくのまき』 とんぼの うんどうかい こぶたはなこさんの うんどうかい どうすれば いいのかな おでかけの まえに ひとりぼっちの ねこ ニャーンといったのは だーれ 三びきの こねこ だいちゃんの ちびねこ まねっこ にゃんこ ちいさな ねこ サンタさんの わすれもの コロちゃんはどこ？ コロちゃんの おさんぽ せっかちまじょの ネル スーパーマン サンタ はらぺこ あおむし	若 山 憲 ディック・ブルーナ (いしい ももこ訳) ボルデ (木村ゆり子訳) やぎた よしこ やぎた よしこ 松 野 正 子 か こ さとし くどう なおこ 渡 辺 茂 男 筒 井 頼 子 松 下 佳 紀 ス テ ー エ フ さいごうなひこ・訳 ス テ ー エ フ さいごうなひこ・訳 山 本 まつ子 末 吉 暁 子 石 井 桃 子 山 本 まつ子 エリック・ヒル エリック・ヒル エリック・ヒル もとはしやすあき エリック・カール (もり ひさし 訳)	若 山 憲 ディック・ブルーナ ボルデ 若 山 しずこ 若 山 しずこ 梶 山 俊 夫 か こ さとし いけずみひろこ 大 友 康 夫 林 明 子 井 本 蓉 子 ス テ ー エ フ ス テ ー エ フ 山 本 まつ子 伊 勢 英 子 横 田 山 本 まつ子 エリック・カール	こ ぐ ま 社 福 音 館 書 店 福 音 館 書 店 童 心 社 童 心 社 童 心 社 偕 成 社 童 話 社 福 音 館 書 店 福 音 館 書 店 金 の 星 社 偕 成 社 偕 成 社 ポ プ ラ 社 ブ ッ ク ・ ロ ー ン 出 版 社 福 音 館 書 店 ポ プ ラ 社 評 論 社 評 論 社 評 論 社 キ ン グ レ コ ー ド Z O K E I S H A 偕 成 社
--	--	---	--

小学部3組で 読み聞かせた本

たべたの だあれ めっきらもっきら どおん どおん へんしん自動車 ももたろう 三びきのやぎの がらがらどん 11びきのねこ 11びきのねことぶた とんとん いれてくださいな こぎつねキッコの『えんそくのまき』 アンパンマン	ボルデ (木村ゆり子訳) 長谷川 摂 子 木 村 裕 一 松 居 直 せ た ていじ 馬 場 のぼる 馬 場 のぼる こいで た ん 松 野 正 子 やなせ たかし	ボ ル デ ふりや な な エム・ナマエ 赤 羽 末 吉 マーシャープラウン 馬 場 のぼる 馬 場 のぼる こいで やすこ 梶 山 俊 夫 やなせ たかし	偕 成 社 こ ど も の 友 偕 成 社 福 音 館 書 店 福 音 館 書 店 こ ぐ ま 社 こ ぐ ま 社 福 音 館 童 心 社 フ レ ー ベ ル 館
---	--	---	--

よもぎだんご	さとう わきこ	さとう わきこ	福音館書店
とべ バッタ	田 島 征 三	田 島 征 三	偕 成 社
おおきな おおきな おいも	赤 羽 末 吉	赤 羽 末 吉	福音館書店
おぼけのバーバパパ	アンネット・チゾン タラス・ティラー	(やました はるお 訳)	偕 成 社
そらいろの たね	中 川 りえこ	大 村 ゆりこ	福音館書店
かっこからんこ からりんこん	川 崎 大 治	遠 藤 てるよ	福音館書店
とんぼの うんどうかい	か こ さとし	か こ さとし	偕 成 社

高等部グループ学習で 読み聞かせた本

— Hクラス —

花さき山	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	岩 崎 書 店
火	斎 藤 隆 介	箕 田 源二郎	岩 崎 書 店
うみをかけるうま	西 本 鶏 介	村 上 勉	金 の 星 社
あやのねがい	黒 河 松 代	赤 坂 三 好	金 の 星 社
鯉にようぼう	松 谷 みよ子	西 山 三 郎	岩 崎 書 店
半日村	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	岩 崎 書 店
お月さん ももいろ	松 谷 みよ子	井 口 文 秀	ポ プ ラ 社
鼻かけじぞうさん	かつお きんや	箕 田 源二郎	講 談 社
けむり仙人	棕 鳩 十	太 田 大 八	ポ プ ラ 社
やまなしもぎ	平野 直(再語)	太 田 大 八	福音館書店
八 郎	斎 藤 隆 介	滝 平 二 郎	福音館書店
スーホの白い馬	大 塚 勇 三	赤 羽 末 吉	福音館書店
野麦峠をこえて	山 本 茂 美	佐 藤 忠 良	ポ プ ラ 社
てぶくろを買いに	新 美 南 吉	いもと ようこ	白 泉 社
ごんぎつね	新 美 南 吉	黒 井 健	偕 成 社
注文の多い料理店	宮 沢 賢 治	池 田 浩 彰	講 談 社
しまふくろうのみずうみ	手 島 圭三郎	手 島 圭三郎	福 武 書 店
おおはくちょうのそら	手 島 圭三郎	手 島 圭三郎	福 武 書 店
おこりじぞう	山 口 勇 子	四 国 五 郎	新日本出版社
ねずみとくじら	ウィリアム・スタイブ (せた ていじ 訳)		評 論 社
スイミー	レオ・レオニ (谷川俊太郎 訳)	レオ・レオニ	好 学 社
フレデリック	レオ・レオニ (谷川俊太郎 訳)	レオ・レオニ	好 学 社
とっかりこっこのこもりうた	わたり むつこ	鹿 目 佳代子	リブリオ出版
かたあしだちょうのエルフ	おのき がく	おのき がく	ポ プ ラ 社

— Mクラス —

花さき山	斎藤 隆介	滝平 二郎	岩崎書店
火	斎藤 隆介	箕田 源二郎	岩崎書店
あやのねがい	黒河 松代	赤坂 三好	金の星社
半日村	斎藤 隆介	滝平 二郎	岩崎書店
鼻かけじぞうさん	かつお きんや	箕田 源二郎	講談社
やまなしもぎ	平野 直(再話)	太田 大八	福音館書店
八郎	斎藤 隆介	滝平 二郎	福音館書店
三ねんねたろう	大川 悦生	渡辺 三郎	ポプラ社
つるにょうぼう	神沢 利子	井口 文秀	ポプラ社
スーホの白い馬	大塚 勇三	赤羽 末吉	福音館書店
てぶくろを買いに	新美 南吉	いもと ようこ	白泉社
スイミー	レオ・レオニ (谷川俊太郎 訳)	レオ・レオニ	好学社
しまふくろうのみずうみ	手島 圭三郎	手島 圭三郎	福武書店
おおはくちょうのそら	手島 圭三郎	手島 圭三郎	福武書店
おこりじぞう	山口 勇子	四国 五郎	新日本出版社
ろくべえ まってろよ	灰谷 健次郎	長 新太	文研出版
かたあしだちょうのエルフ	おのき がく	おのき がく	ポプラ社
まっくら ネリノ	(矢川 澄子 訳)		偕成社
おしゃべりな たまごやき	寺村 輝夫	長 新太	福音館書店
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上野 紀子	ポプラ社
しろいうさぎと くろいうさぎ	ガーズ・ウィリアムズ (松岡 亨子 訳)	ガーズ・ウィリアムズ	福音館書店
100 まんびきのねこ	ワンダ・ガアグ (石井 桃子 訳)	ワンダ・ガアグ	福音館書店
とっかりこっこの こもりうた	わたり むつこ	鹿目 佳代子	リブリオ出版
はらぺこ あおむし	(もり ひさし 訳)	エリック・カール	偕成社
はるかぜのたいこ	安房 直子	葉 祥明	金の星社

— Lクラス —

花さき山	斎藤 隆介	滝平 二郎	岩崎書店
鼻かけじぞうさん	かつお きんや	箕田 源二郎	講談社
おおはくちょうのそら	手島 圭三郎	手島 圭三郎	福武書店
おおきなかぶ	内田 子(再話)	佐藤 忠良	福音館書店
三びきのやぎの がらがらどん	瀬田 貞二・訳	マーシャ・ブラウン	福音館書店
もしもし おでんわ	松谷 みよ子	岩崎 ちひろ	童心社

もしもし おかあさん	久 保 喬	いもと ようこ	金 の 星 社
ぐりとぐら	中 川 りえこ	大 村 ゆりこ	福 音 館 書 店
しろくまちゃんのほっとけーき	若 山 憲	若 山 憲	こ ぐ ま 社
ぼくのうち どこ	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
はらぺこ あおむし	エリック・カール (もり ひさし 訳)	エリック・カール	偕 成 社
おじさんの かさ	さ の ようこ	さ の ようこ	銀 河 社
11ぴきのねこ	馬 場 のぼる	馬 場 のぼる	こ ぐ ま 社
はなを くんくん	ルース・クラウン (きじま はじめ 訳)	マーク・サイモンド	福 音 館 書 店
しろいうさぎとくろいうさぎ	ガーズ・ウィリアムズ (松岡 亨子 訳)	ガーズ・ウィリアムズ	福 音 館 書 店
あそびにきてください	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
てぶくろ	内田 子 訳	エウゲーニ・M・ ラチョフ	福 音 館 書 店
エンとケラとパン	岩 村 かずお	岩 村 かずお	ポ プ ラ 社
りんごがたべたい ねずみくん	なかえ よしを	上 野 紀 子	ポ プ ラ 社
はるかぜの たいこ	安 房 直 子	葉 祥 明	金 の 星 社

季節にちなんだ絵本

村いちばんのさくらの木	来 栖 良 夫	斎 藤 博 之	岩 崎 書 店
うすずみのさくら	清 水 達 也	北 島 新 平	ほ る ぶ 出 版
たなばた	君島 久子(再話)	初 山 滋	福 音 館 書 店
つきがみていたはなし	も り ひさし	菊地 としはる	こ ぐ ま 社
つきのぼうや	イブ・スピング・オルセン (やまのうち きよこ 訳)	イブ・スピング・ オルセン	福 音 館 書 店
こんやは おつきみ	谷 真 介	北 田 卓 史	金 の 星 社
14ひきの おつきみ	岩 村 かずお	岩 村 かずお	童 心 社
ぐりとぐらの おきゃくさま	中 川 りえこ	大 村 ゆりこ	福 音 館 書 店
サンタクロースってほんとにいるの？	てるおか いつこ	杉 浦 はんも	福 音 館 書 店
おしょうがつさん	矢 崎 節 夫	尾 崎 真 吾	ポ プ ラ 社
おにたのぼうし	あまん きみこ	岩 崎 ちひろ	ポ プ ラ 社
おにのよめさん	き し な み	福 田 庄 助	偕 成 社
ひとりぼっちの かみさま	竹 崎 有 斐	伊 勢 英 子	金 の 星 社
ぼとん ぼとんは なんのおと	神 沢 利 子	平 山 英 三	福 音 館 書 店
おかあさんの 紙びな	長 崎 源之助	山 中 冬 見	岩 崎 書 店

科学絵本 はじめてでである科学絵本シリーズ・かがくのとも傑作集シリーズ(福音館)
 フレーベルの科学えほんシリーズ(フレーベル館) 知識の絵本シリーズ(岩崎書店)
 (内田 明德 今井 康弘 勝尾外美子 名倉 雅子 林 秋子)